

# 児童文学もまた多様な人間モデルの宝庫 登場人物を通して学ぶ、様々な人生の機微

翻訳家・児童文学研究家

## 清水眞砂子さん

日本ではアニメ映画で脚光を浴びたルグウィン著の『ゲド戦記』。世界屈指のファンタジーを表現した児童文学書です。その全6巻の翻訳家として知られる清水眞砂子さんに、児童文学の魅力を語っていただきました。



『ゲド戦記』著者のルグウィン氏を訪ねてオレゴン州ポートランドにて

### 翻訳家への第一歩

大学卒業後、9年間高校の英語教師をしていました。当時は、翻訳という仕事は遠い世界のものだと思っていました。ところが、ひよんなことから低学年向けの絵物語の翻訳を試みないかと大日本図書編集者に声を掛けられました。この私の最初の仕事を児童文学者の故・瀬田貞二先生がご覧くださっていて、ご著者の中で、「あの幼児文学の翻訳はいい」と評価してくださいました。瀬田先生は私にとって、当時からずっと雲の上の存在でした。名もない私の翻訳に目を留めてくださったことにびっくりしました。編集者からも、「あなたはよき日本語の本をたくさん読まれてきましたね。文体に出ています」と言われて、びっくり。翻訳という仕事の面白さにも気付かされました。

### 人生を支えた2冊の子どもの本

私は、子どもの頃から本を読むのは好きでした。その中でも覚えていたのは、従兄弟のお兄さんからプレゼントされたチャールズ Dickens の小説『クリスマス・キャロル』です。登場人物の中に、金持ちなのにケチで貪欲なエプニゼル・スクルージという老人がいて、小学低学年だった私は、世の中にこれほどケチな人がいるのかと驚きました。でも、そのスクルージの話のお蔭で助けられたこともあります。子どもの頃に住んでいた家の近所に、こわいおばさんが住んでいて、おばさんの家の庭先でタンポポを採っただけで叱られ、近所の子とも達はみんな怖がっていました。そんな時に、『クリスマス・キャロル』のスクルージを思い出すのです。おばさん

### 違和感を打ち消す本力

大人になり、子どもの本の仕事に携わるようになってから、「なぜ、『世界をまわろう』にあんなにも惹き付けられたのだろう」と考え、子どもの頃の暮らしに思い当たる節を見つけました。戦後、私の家族は現在の北朝鮮から引き揚げてきて、両親の故郷である掛川で暮らしていました。周りに田んぼがあり、のどかな田園風景の広がる田舎でした。私は子ども心に、村の人々と同じよ

うな暮らしでいいのに、なぜか、私の家族はちょっとズレているんだろうと感じていました。お使いに出ると、隣のおばさんに声を掛けられる。「石鹸を買いに行くの」と伝えると、「まあまあ、しゃらくらかいて(おしゃれして)」などと言われるのです。

植民地に住んでいた時に普通だった暮らしは、戦後の掛川の村では特別なものだったのです。私達家族と村の人々の間で生じる様々なズレを、子どもの私としても辛く感じていました。そういう時、この本は「世界は広いんだよ、人々は色々な暮らしをしているんだよ」と元氣付けてくれたのです。

### 登場人物から学んだ寛容さ

やがて『小公女』や『アルプスの少女ハイジ』などを読むようになると、そこには性格や振る舞いや考え方の異なるさまざまな登場人物に出会います。ハイジとおじいさんのように、子どもと大人が親を越えているような絆を深める場面にも遭遇します。

子どもにとっては、自分の身の回りの体験や出来事だけではない世界を、本の世界では疑似体験でき、私たちの心身を解放してくれるように思います。

子どもの頃に本の中で出会った登場人物や世界観は、私に人間の多様性を伝

えてくれました。そして、私自身に降りかかる違和感をやわらげてくれただけではなく、私とは異なる他人の考えや意見を受け入れる寛容さを促がし続けてくれました。おかげで、海外に行ってもすぐに現地の人と打ち解けられますし…。それは私にとってはごく自然な振る舞いで、当たり前のこと。子どもの頃に読んだ児童文学の恩恵によつて、私は人生をより楽しく過ごすことができていると思っています。

### もつとわがままに、楽しく生きる

短期大学で教鞭をとっていた時、学生達に向かって「思う存分に！とことん生きてみなさい。人生はとつても楽しいし、面白いわよ」と話しました。その時、一人の学生が手を上げて、「先生、それって、わがままじゃないですか？」と言いました。その言葉に、私はもうびっくりしてしまつて、「自分が思うままに人生を生きて」とは、わがままに生きること」とそういうふうに親から教えられているのだなと思ひました。

今の社会では、平均的な考え方をし、平均的に生きていくことがいよいよに思われているようですが、「それで生きていくことになるの？」と思つてしまいます。



青山学院女子短期大学卒業生のみなさんと自宅にて

先日、随分前の卒業生から手紙が届いて。そこには、「先生の授業は、私を縛っていた鎖を解いてくれました」と書かれていました。親や先生に「これはしてはいけない、こうしなさい」と言われて育ってきた私を、「先生の言葉は広い海原にポーンと放り出してくれました」と、手紙は続いていました。嬉しかったですね。

自分で考えて行動することが人生の楽しさであり、そのためには、奇天烈な人、変わった人、生真面目な人、頑固な人などいろいろな人と現実に出会うことも

大切でしょう。でも、児童文学を含めて、さまざまな文学作品にふれると、いつの時代であっても通用する多様な人間モデルに出会うことができるのです。こんなすてきなものをほうっておくなんて、もったいなさすぎませんか。

### Shimizu Masako

翻訳家、児童文学研究家。1941年生まれ。静岡大学教育学部卒業後、県立高校教諭(英語担当)を経て、1976年から2010年まで青山学院女子短期大学専任教員。現在同大名誉教授。1968年から児童文学の翻訳ならびに評論の仕事を始め、1974年に評論「石井桃子論」(『講座日本児童文学8 日本の児童文学作家3』所収、明治書院、1973)で第7回日本児童文学者協会新人賞を受賞。主な訳書にマヤ・ヴォイツェホフスカ『夜が明けるまで』(岩波書店)、ルグウィン『ゲド戦記』全6巻(岩波書店、第41回日本翻訳文化賞受賞)。主な著書に『子どもの本の現在』(大和書房)、『子どもの本のまなざし』(洋泉社、第33回日本児童文学者協会賞受賞)、『大人になるっておもしろい?』(岩波書店)、『子どもの本のもつ力—世界と出会える60冊』(大月書店)。